

東アジア日本語教育・

日本文化研究学会報告

212

新羅大学院特別教授 藤井茂利

22年8月27日(土)、韓国の新羅大学を基地にして東アジア学会が保坂敏子会員の司会で9時30分から始まった。金銀英会員が会長宅にオンラインの準備を下さって会に参加できることになった。中島副会長も来宅して参加する約束であった。

最初に会長挨拶をして、今回オンラインの基地になって下さった韓国の新羅大学に感謝の辞を送った。特に崔光淳副会長は今年度が大学定年退職で何かとお忙しい中、学会の仕事をして下さりありがたく思う念を述べた。

会長挨拶が終わって10時から招待講演になっているが事務局から講演者になる連絡は全くなく用意していたのは従来の口頭発表20分間の内容でしかなかった。

それには夫(そと)日月は上に照りて私(わたくし)せず。神(かみ)しき井(い)は下に出でて給(たま)はずといふことなし。」と書かれている。必要部分(必要部)は神(かみ)しき井(い)は下に出で「無不給(むふたたま)であるが、「給(たま)を「たまふ」と訓でいる。現在「給(たま)の漢字は「たまふ」と訓まれ「上位者が下位者に物を与える意に使われている。上位にあるのは温泉(温泉)でそれを受けているのは民(たみ)として

口頭発表のままポスターに載せられていたが、その題目は「上代日本語の「給」の漢字の訓読

「道後湯泉碑」の中の「給」
発表者 藤井茂利(学会副会長)

であった。「レジュメ」の文章も20程度の内容であるが記録のため全文を述べておくことにする

法興6年(AD596年)建てられたと言われる「伊予道後湯泉碑」に「夫日月照於上而不私 神井出於下無不給の文章が書かれている。この文章は伊予国風土記(逸文)に収録されているが、この文章の訓読、書き下し文が「新編日本古典文学全集『風土記』小学館」に載せられている。

右はレジュメ週に載せた文章で少し手を入れたあるが「ういつ内容である。「給」の漢字の訓は最初は「足す」継ぐであるのは一般に知られていないと考えらるる。AD596年の頃には「給」に「たまふ」の訓があったとは考え難いように思われる。この温泉碑は「問欠泉」と考

えられる湯で、時間を置いて計画通りに地下位から温泉を出す神業(しんぎょう)的不思議(ふしぎ)さを讃(ほ)める内容である。であれば「給」の訓読みの「たまふ」など全く方向違いで「無不給」は「神(かみ)しき井(い)は下から時間になれば途切れることなく継いで噴出する」という意味に訓むのがよいのではないかと考えらるる。

以上のような内容の話であり、ゆっくり話しても15分もすれば終わってしまった。

次の「賜」の問題に入っても話が混み入ると思ったので休憩時間として10分ばかり頂くことにして余談になった。架空の話であるが日本の隣国に英語を話す国があったとして、

A book and little friend
did not know circle

を書いたとする。「二冊の本と少ない友はサークルを知らなかった何の意味か解せないが、これは日本語を書いた文で、「a」は「ブ」、「book」は「本」、「and」は「と」、「circle」は「ま」となりませう。

「little」は「小やい」、「friend」は「友」であるが少し訛り「ち」とも]

「did not know」は英語の「ままで」知らなかったであり、「circle」は「輪」と読まず「わ」に従って

「あ、本(ほん)当(あた)ち(ち)い(い)とも知らなかったわ」の日本語を無理に英語で書こうとしたものであるがこれを漢字で書くとなれば、
例えは、

阿(あ)、品(ひん)等(とう) 知伊(ちい)等毛(とうもう) 斯羅(しらか) 那加(な)都多(と)和(わ) と書くとなれば万葉集の音仮名の表記法と同様の方式となつて読み方は、「あ、ほん(ほん)と(と)ち(ち)い(い)ともし(し)ら(ら)な(な)か(か)つ(つ)た(た)わ」
となる。

漢字は同音語が多く、この漢字を用いるかによつて表記者の出身地を知ることも出来英語による日本語表記よりも使用範囲が広いように思われる。「阿」の音仮名は日本では万葉集巻5の山上憶良が「安(あ)は葉集巻5で大伴旅人が使つていることなど判る。など話している間に休息余談の時間は終わった。